

東京大学が保管している沖縄県由来の人骨について

報告書

国立大学法人東京大学

2025年12月12日

はじめに

東京大学での人骨の収集は、本学の創設期に教授として日本に滞在したアメリカ人エドワード・モースが、1877年の大森貝塚（東京）の発掘において縄文時代の人骨を発見したことが始まりです。

このような100年以上の本学の研究の歴史の中で収集された人骨の中に、この度、沖縄由来と考えられる人骨があることが、以下のとおり判明しました。これは現在まで残された文献記録、ならびに関係する地元自治体等からご提供いただいた情報により明らかになったものです。これらに関しては、関東大震災や第二次世界大戦の戦禍などで、収集関連の記録が失われてしまったものが少なくありません。この点、大変遺憾に思っております。

本学は沖縄の関係自治体および市民の皆様と連携しながら、可能な限り丁寧な調査を継続しております。まずはここまでまとまった情報を公開させていただきますが、今後も関連情報等は、逐次公表してまいります。

本調査にご協力いただいた、中城村教育委員会、今帰仁村歴史文化センター、那覇市、石垣市教育委員会、与那国町教育委員会、沖縄県教育庁文化財課の皆様、中城村由来の人骨および笛森儀助が関わった人骨について文献情報をお知らせ頂いた松島泰勝教授（龍谷大学）に、厚く御礼申し上げます。なお、本報告の内容に関する責任は、すべて東京大学が負うものであることも、合わせて申し添えます。

東京大学所蔵の沖縄県由来の人骨の概要

- ① 中城村（沖縄本島） 頭骨 18点
- ② 今帰仁村（沖縄本島） 頭骨 1点
- ③ 那覇市（沖縄本島） 頭骨 4点ほか
- ④ 石垣市（石垣島） 頭骨 3点
- ⑤ 与那国町（与那国島） 頭骨 1点
- ⑥ 沖縄・市町村不明 頭骨 1点ほか
- ⑦ その他 頭骨 3点

東京大学が保管している沖縄県由来の人骨について

① 中城村（なかぐすくそん・沖縄本島）

頭骨 18 点。鳥居龍蔵が、伊波普猷の同伴で実施した、1904 年の沖縄学術調査の際に収集したものと考えられる。1 点の骨表面に、「沖縄本島（穴墓ナラン）」（＝穴墓だろう）との記載がある。他にはそうした記載がないが、骨の保存状態からみて同じ由来と思われる。これら以外の由来に関する付随情報が現存せず確定はできないが、上述の記載と数からみて、鳥居龍蔵が自身の日記で、1904（明治 37）年の沖縄における学術調査の際、中城城付近の岩陰石囲い墓に地元教師らに案内されて収集したと記しているものと思われる。

中城村教育委員会から提供いただいた情報によると、鳥居の記載から読み取れる現地は、中城城周辺で、以下の 2 か所に絞られる。

- ① 城郭東側崖下地区の古墓群（14 世紀後半～近世・近代）
- ② 台グスク地区の古墓群（近世～近代）

当地には岩陰石囲い墓のほか、亀甲墓など、時代も形式も様々な墓があるが、戦後の改修に加えて、県営公園整備事業により上記に該当する土地は県に買上げられており、墓の移転も進んでいる。墓主も分からぬ墓はそのままの状態で残されているが、草木が生い茂り、現状で鳥居が訪れた岩陰石囲い墓を特定することは困難である。中城村教育委員会においては、2025 年 11 月に現地確認を行ったが、日記に記された形状の墓の特定には至らなかった。なお、担当者によれば、鳥居が日記に描いた木製の家形棺（図中「G」）は、中城村内では見たことがないタイプのもので、現地の改変により失われたか、朽ち果ててしまった可能性がある。鳥居自身が「近頃の」墓を避け、地元教員が同伴する中で収集を行っていることから、そこは当時においてもご遺族を特定できるような墓であったとは思われない。現在、この地域の移転していない古墓の祭祀継承者はおらず、地元自治体において、残された厨子甕や人骨などは文化財、墓は遺跡とみなされている。

【参考】

鳥居龍蔵（1870－1953）：明治期からアジア各地をめぐって先駆的な調査を行った人類学者。

我が国ではじめてフィールドワークに写真機を持ち込んだことでも有名。1904 年の沖縄調査では、蓄音機を使用して民謡などの収録を行ったが、これも我が国ではじめてのことだった。1904 年当時は東京帝国大学理科大学人類学教室助手。

伊波普猷（1876－1947）：那覇市出身で、沖縄の民俗、文化、歴史、宗教などを幅広く研究し、「沖縄学の父」と呼ばれる。1904 年当時は東京帝国大学文科大学文学科の学生で、鳥居の沖縄本島の調査は伊波の案内の下に行われた。

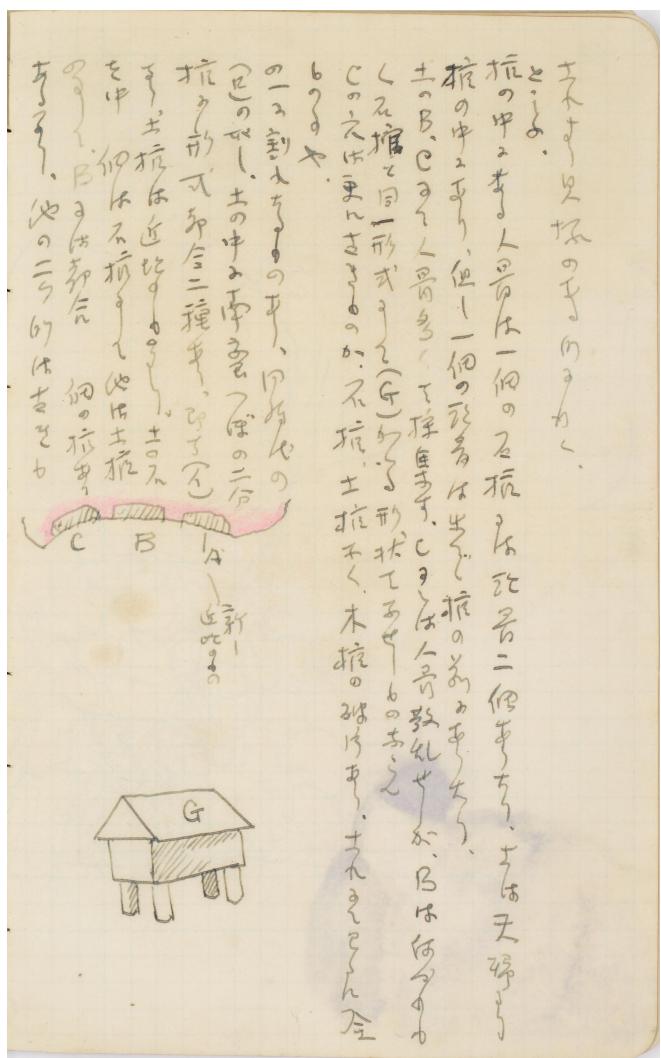
【文献】

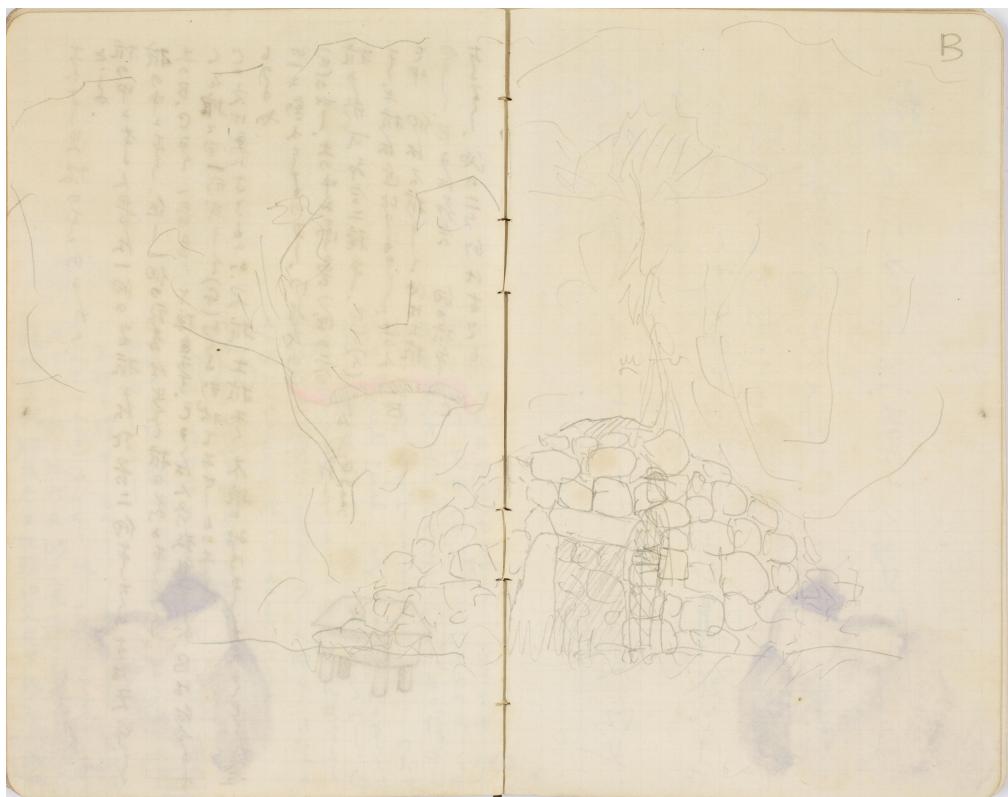
鳥居龍藏の日誌『沖縄のたび』

『沖縄のたび』の関連個所

徳島県立鳥居龍藏記念博物館蔵、次ページに現代語訳

一便土から圓で安里ヤリ即ちと申す。中一ヶ所は近畿の如き申す。その名えは有合三ヶ所も、其の様子印と石柱と申す。又申す。即ちの如きは、その様子をさへ五ヶ所も申す。即ちの如きは、石柱の五ヶ所も申す。因て之はさう申す。





(現代語訳) ※文中 A、B、C、G、ならびにイ、ロは、日誌上より

学校教員諸氏が言うには、これより少し降りれば、自然に石棺の並んでいる所があると言う。そのため、一緒にそこへ行った。学校よりここまで五六町〈500~600m〉行った所である。場所は Raised Coral Reef の岩窟内にあって、外部を石で塞いでいた。されど内部はよく見えた。ここの岩穴は都合三ヶ所である。互に接近していて、同一の岩である。そのうち一ヶ所 (A) は近頃のもので、中に一個土かめ [図] を安置していた。即ちその中に人骨があった。

* [図中 A の注釈] 新しい、近頃のもの

他の二ヶ所は古いもので、B に都合 [空白] 個の棺があった。そのうち [空白] 個は石棺で、他は土棺であった。土棺は近頃のものである。土棺と石棺の形式は都合二種あった。即ち (イ) (ロ) のとおりである。土の中に南蛮壺の二分の一に割れたものがあった。同時代のものであろうか。C の穴は更に古いものであろうか。石棺や土棺はなく、木棺の破片があった。これを見るに全く石棺と同一形式で、(G) のような形状をしたものであろう。この B、C で人骨多くを採集した。C にては人骨が散乱していたが、B は何れも棺の中にあった。但し一個の頭骨は外に出て、棺の前にあった。棺の中にある人骨は、一個の石棺には頭骨二個があった。これは夫婦のものであるとみえる。

これより貝塚のある所へ行く。

② 今帰仁村（なきじんそん・沖縄本島）

「琉球運天（松村）」と記載がある頭骨 1 点で、入手経緯等の詳細は不明。「松村」は松村瞭（東京帝国大学理科大学人類学教室選科を卒業し 1925 年に助教授）と思われる。松村瞭は 1919 年に北中城村の荻堂貝塚の発掘調査を実施しているが、当人がこの頭骨の入手にどう関与したのかは、残念ながらわからない。

運天には、百按司（ムムジャナ）墓、大北（ウーニシ）墓、大和墓、オランダ墓など歴史的な墓のほか、50 余りの無名の古墓がある。東京大学にある頭骨がどれに由来したものかは残念ながら特定できないが、現地専門家の評価によれば、百按司墓か無名の墓の可能性が疑われる。

今帰仁村の文化財となっている百按司墓は、15 世紀頃の沖縄最古級の風葬墓で、どの一族のもであったか特定には至っていないが、貴族階級の人々の墓と考えられている。なお、京都大学が保管していた百按司墓由来の遺骨は、2019 年に今帰仁村に移管されている。無名の古墓群は崖の中腹を掘り込んで、板で閉じるなどしたものである。内部には木棺、石棺、骨を入れた壺などがあるが、墓碑などではなく、どのような背景で築造されたのかよくわかっていない。

【文献】

- 今帰仁村教育委員会（1993）『なきじん研究 3 今帰仁の歴史』今帰仁村教育委員会
今帰仁村教育委員会（2004）『百按司墓木棺修理報告書』今帰仁村文化財調査報告書 18
今帰仁村教育委員会（2013）『運天古墓群 I』今帰仁村文化財調査報告書 33

③ 那覇市（沖縄本島）

頭骨 4 点、上腕骨 3 点（それぞれ別個体）、大腿骨 1 点、脛骨 1 点。

東京大学理学部人類学教室教授（1972 年まで）の鈴木尚（故人）が研究のために保管していた人骨で、1994 年 9 月に本学総合研究博物館人類先史部門に移管された。移管時に鈴木から伝わっている由来等に関する情報は「沖縄県那覇市の洞窟」「風葬墓」だけであった。

那覇市と確認する中で、これらの人骨は保存状態がよいことから、厨子甕に納められていた可能性があると思われる。鈴木がこれらを保有するに至った経緯は推測するよりほかないが、例えば以下のようなケースがあり得るだろう。

まず、鈴木は 1967～1974 年に沖縄の現地調査に関わっていたので、関連の研究活動の一環としてこれらを保有するに至った可能性がある。ただし、もしそうであれば遺跡名や地点名の記録があってよいはずであるが、それがないのはやや不自然に思われる。もう 1 つの可能性は、鑑定や研究のために外部から寄贈されたというものである。ただしそれを示す依頼文や手紙類は付随しておらず、これも推測の域を出ない。

④ 石垣市（石垣島）

頭骨 3 点。

[1]

明治期につくられたカードに「与那国島大和墓 琉球人頭骨、 笹森氏より預かり 雑誌に記載あり」と書かれている。『南嶋探検』（笹森儀助著）によれば、 笹森が人骨を持ち出（借用）したのは与那国島ではなく石垣島なので、 カードの与那国島との記載は誤りであろう。カード裏面には松村瞭の計測値が記されている。

『南嶋探検』によれば、 1893 年に、 笹森が専門家に鑑定してもらうために、 平久保村地内字河原浜の大和（八島）墓より、 地元巡査の立ち合いのもとで持ち帰ったもの。 大和（八島）墓は、 地元において、 壇ノ浦で敗れた平家の落ち武者の墓とされており（下記解説参照）、 笹森は「いよいよ平氏の遺骨だと決定すれば、 一社を建ててこれを祀ろうという気持ち」で、 大学研究者に鑑定を依頼することを決意した。 巡査は祟りがあると忠告したが、 笹森は忠義心から実行。 しかしその後あるべき手続きについて考え直し、 最終的に沖縄県警察署から「一時拝借する許可」を得て持ち出した。 借用後にどこに返却する話になっていたかは不明だが、 いずれにしても東京大学が預かったまま返却していなかったことになる。 なお、 1895 年に足立文太郎がこの頭骨について研究報告を出版しているが、 そこでも「与那国島平久保村地内字河原浜」とされ、 与那国島と石垣島を混同している。

石垣市教育委員会から提供いただいた情報によれば、 この「大和墓」は現在も一周することが可能で、 コンクリートで補強された石積がとりまいた岩陰墓が数か所確認される。 2025 年 11 月の現地調査では墓室内部は踏査しなかったが、 喜舎場や郷土史家の大濱永亘によればそこには木棺が認められるという。 この地点は一周できること、 また周囲には各所の岩陰墓が点在することは、 笹森の記述と一致している。 従って、 大和墓からの持ち出しでほぼ間違いないと考えられるが、 どの岩陰墓より採集したかは不明である。

解説【大和（ヤマト）墓】

1885（明治 18）年に八重山役所長の西常央が川平を巡回した際、 付近に散在する遺骨をここに集めて平家落人の墓として供養し「大和墓」と称した。 実際は在地の古墓であったことは明らかだが、 笹森もこの誤った言説を信じた。 その後も地元では、 川平の墓と共にヤマト墓或いは八島墓と称され、 1972 年の沖縄県教育委員会が実施した分布調査報告においても、「ヤマト墓」として遺跡地図にプロットされている。

笹森が取り上げてヤマト墓が広く知られるようになってから 130 年が経過した。 石垣市教育委員会から提供いただいた情報によれば、 これまで当該地での調査も進み、 現在、 周辺

にはヤマト墓以外にも、吉野遺跡周辺およびヤマト墓北側の露頭した琉球石灰岩を利用した同様の岩陰墓が確認されている。さらに、ヤマト墓の年代は褐釉陶器や染付などの表採資料から 16 世紀頃（中森期）と想定されている。近年の島内の発掘成果では、中・近世の集落（居住域）と墓域がかなり接近している場合が多いことが明らかになっている。このことを踏まえると、ヤマト墓は吉野遺跡や吉野第二遺跡などに関わる墓であり、集落としての利用が終焉して以降は無縁墓地化して長く放置されていたが、明治期に入って本土からの来島者（ 笹森等）の来訪を契機に、源平の頃のヤマトに由来するものではないかとの話が広まり、ヤマト墓の名称が定着したと考えられる。

【参考】

平久保村地内字河原浜：平久保は石垣島の北部の大字名である。八重山博物館に残されている喜舎場永珣資料の内、調査ノート資料「伊原間 平久保研究 大正九年十二月」の中では、「平久保の西・・・川（瓦）良湊」と表記されている。

笹森儀助：青森県出身の探検家、政治家、実業家。1893年（明治26年）に製糖の可能性と住民の実情を知ることを目的として沖縄～与那国島を探査し、その様子を『南嶋探検』にまとめた。沖縄の住民の暮らし改善に貢献したとされる。

足立文太郎：明治期の著名な解剖学者の一人。京都帝国大学医学部教授。「日本人の体質の研究」などを著し、当時原始的また進化的とされた身体的特徴において人種間の優劣はないという結論を導いた。

【文献】

足立文太郎（1895）「琉球與那國島岩洞中ノ一頭蓋」東京人類學會雜誌 10 卷 114 号 p.466 –472

沖縄県教育委員会（1972）『石垣島の遺跡』沖縄県教育委員会

喜舎場永珣（1977）「大和墓の由来」『八重山民俗誌（下）』沖縄タイムス社

笹森儀助（1894）『南嶋探検』

本宮かをる・レジス、オルリー（1999）『足立文太郎のひとと業績について』日本医史学雑誌第 45 卷第 2 号 p. 270–271

【現代語訳】 笹森『南嶋探検』(抜粋)

八月十四日

正午十二時、伊原間村を出発し、西海岸を通って三里で平久保村地内字河原浜に到着した。大和墓・八島墓ともいう標木があった。下馬して森林の中に入る。十歩で岩窟の間に人骨があった。携えてきた香花を供え、靈を弔慰した。一周すると二十間あまりの各所の岩洞中にある数十個の碎片はみな人骨であった。一つの洞、わずかに完全な髑髏が二個あると伝えられている。昔、平氏が壇ノ浦で敗れた後、逃れてここに上陸した。これはその遺骨であると。側にまた髑髏一個と刳木箱（丈は四尺くらい、幅は方尺〈一尺（約30.3cm）四方〉あまり）が半ば土砂に覆われて納骨の棺ではないかと疑われる。その一片を携えた。同行した巡査が言うには、昨年石垣四個村の某がこの骨を見て帰村したところ、いく日もしないうちに、発狂し割腹して死亡した。今あなたがこれを携えて帰った場合、その後の災難が恐ろしいと忠告された。私が言うには、平氏の忠義なる武士の遺骨であって、世の中に表彰されず空しく恨んでこの荒野に飲み込まれ、「千載不祀〈長い年月祀られない〉」の鬼となったのである。私がこれを携えて帰京したうえで、大学の学士の判定を依頼し、いよいよ平氏の遺骨だと決定すれば、一社を建ててこれを祀ろうという気持ちである。骨がもし私を不敬だとして死に至らすとしても、もちろんこれを甘受しよう。忠義の骨を表彰して死んだとしても、私は天地に恥じることはない。私の死の期限は一日ではない。必ずこれを携えていこう。距離にして五町あまりで平久保村番所に着いた。午後三時であった。夕飯を食べた。男女群集これを見て小声で喋り続けていた。土人の人骨を見て神するために、これを手にしたことを非常に恐れていた。それ以来それぞれ宿泊〈する場所の〉主人が恐懼して見てはひそひそ喋るのは困り果てた。（編者曰く、この頭骨のことについては別に記すところがある）

南嶋探検2 琉球漫遊記

八月十八日

午後九時警察署に出頭し、田尻警察署長に面会し、北川氏先導に感謝した。続いて八島墓より髑髏を携えて帰京のうえ、人類学者にその鑑定を請い、もし本物であれば、縁故のある人に依頼してその事蹟を明らかにし、その忠魂を顕彰しようとするものであるから、密かに持ち帰るべきではない。どのようにすれば、ご職権の妨げもなく、私の志願を貫くことができるか〈尋ねた〉。同氏（田尻警察署長）が答えた。承ったうえでは、同意して持ち帰るのが当然だとは言えない。何れ警部長に稟申したうえで、一時的に本人（笹森）へ引き渡すよう当署へ通達が得られれば、管理上の主意も立ち、至極穩当であることなので、その考えに従い、人骨を左の書を付して警察署に送る。

忠骨を送る書

昔源平が八島で戦い、全軍沈没することがあり。道義として二人の君主には仕えない。節操として源氏の粟は食べずに遠い【異俗の】孤島に流れて寓居し、その死後子孫に祀られることなく遺恨を呑んで遺骨を留めた。これを名づけて忠骨という。私は本島を巡遊した途中で、香典しいささかその怨恨を慰めた。われわれの王代の正史というものは、その初めの多くは口碑〈言い伝え〉によって成る。当該の島の文化は未だ明らかになっていない。村の老人や農夫は八島墓と称している。私は老人たちの伝説を信じて、忠骨というものの、天下の人はこれを信じていないのをどうしようか。そこで、遺骨を拾って同行すること十四里ほどを経て、八重山警察署長田尻氏にその旨を陳述した。田尻氏が言うには、その志には同意するものの、私の行いは法律に従わない可能性があるのではないか。公正で私心のない言葉に私も全く同意した。そこで、忠骨とここで決別した。忠骨よ、靈があるならば私の言葉を聞け。今志を高く法を犯す罪は元より甘受して辞さないところだが、刑を受けた人の言葉は天下の信頼を欠く。そのため、〈法を犯すこと〉忠骨のために益はない。そのため、これを当署に納めて、その筋で正当の手続きをして、再会する時を待とう。もし不幸にして官許を得られなければ、耐えて天命をまもるべきである。

明治二十六年八月十八日 青森県草莽の士 笹森儀助

右の一書を添えて平久保村八島墓より携えた髑髏一個の箱を造り、これに盛り、出発の際に同署に引き渡した。その際私が宿泊した床の間に飾り、香花を供えた。男女群をなし、一目見ようと願った。土人、鬼神と崇敬するためである。また、私のように鬼神である者にはかかわらず天罰を受けないのは何故か、昨年何某かが屠服の罰を受けたようにならないのを怪しんでいた。

九月二十二日 雨

午前八時、警察本部へ出頭するよう言って来た。そのため出頭すると、先日八重山警察署へ預けて置いた処分を伺った人骨、一時拝借する許可を得た。左の証書を提出し、下付された。

証

一 髑髏

右は年代考究のため、その筋の人に鑑定を請うため、暫く借用いたします。

明治二十六年九月二十二日

沖縄県警察署御中

【現代語訳】 足立（1895）（抜粋）

○琉球与那国島岩洞中の一頭蓋

医学士 足立文太郎

与那国島は沖縄群島最南西の一小島にして、台湾から僅かに四十海里である。

南島探検者笹森儀助氏の報告（南島探検、明治26年11月、210葉、260葉、263葉）により、与那国島平久保村字川原浜の岩洞中に人骨が多数あることを知った。氏が記したところによれば、島人はこれを八島墓または大和墓と称し、昔の平家の遺骨であるとの言い伝えがあったという。

その後沖縄県に出張した医科大学教授三浦守治博士および助手森島医学士の話（明治28年7月）によつても、同群島特に徳島の岩洞中に数百千の骸骨があると聞いた。しかし、両氏の聞いた伝説は平家の遺骨とも、島津家藩士の遺骨だとも言われている。

またかつて聞いたところによると、琉球人には祖先を骨格として保存する風習があるといふ。

笹森氏は種々の困難をもつて公に（276および277葉）平久保村の頭蓋一個を得て、これを理科大学人類学教室に携えて来た。その鑑定を望まれた。しかしながら同教室教授坪井正五郎氏が私をもつて調査させてくれたこと、恩師医科大学教授小金井博士のこれに対し種々の便宜を図ってくれたこと、および笹森氏の研究に対して好材料を送られたことには深謝するところである。

次にこの骨についての記載を掲げる。

壮年(Adultus)の頭蓋(Calvarium)

稍小。褐白色を帶びる。また緑白色も帶びる。滑らかにして強固。よく保存されていて完全。非常に重い。

前面(Norma facialis)顔は脳頭に比べると比較的小。前頭は広くないが高く、穹窿〈弓形〉は大きくなく鉛直に近い。

前頭の結節は著明。眉弓および眉間は弱い。眼窓口はやや大きく鈍隅の四角形、しかしその横軸は殆ど地平である。眼窓の縁は鈍くない。内腔は中等大で両側は弱度の眼窓篩(Cribrum orbitae)があり、上顎骨の眼窓面は後部がやや豊隆。鼻根は強く弯曲（凸前方に向かう）し、鼻骨の長さ広さは中等。鼻口やや高い。鼻口の下縁は鈍くなく、前鼻棘は著明。

[2]

骨表面に「採集地沖縄石垣島平得村」と記されている以外の詳細は不明。明治期につくられたカードが付属しているが、表面は無記載で、裏面に Native of Loo Choo (琉球人) と書かれているのみ。

現在の石垣市字平得（ひらえ）は、石垣市の繁華街から於茂登岳へ至る地域である。石垣市教育委員会から寄せられた情報によると、この付近の道沿いには、かつて行路病者や伝染病で亡くなった人を葬ったとされる場所があった。また、字真栄里には真栄里撫原古墓群と呼ばれる津波石を利用した岩陰墓があり、石垣市による近年の発掘調査によれば、これは、主に 18 世紀前半から 19 世紀（パナリ期）に営まれた、平得・真栄里集落と関わる風葬墓であったらしい。ただしこの墓地への平得村の関与は、1765 年に平得村から真栄里村が分離するより前までであったと思われる。[2]の頭骨の由来は不明だが、このような無縁墓地化した古墓から採集された可能性が疑われる。

【文献】

石垣市教育委員会（2021）『真栄里撫原古墓群』石垣市文化財調査報告書 40

[3]

骨表面に「採集地沖縄県石垣島森山村」と記されている以外の詳細は不明。明治期のカードは付随していないが、骨への注記は[2]と同様の筆跡・形態であり、同じ頃に収集された可能性が高い。

石垣市教育委員会から寄せられた情報によると、森山は、石垣島の大字盛山のこと、現在の石垣空港の近くにある地名である。当該地には近世の琉球王国時代に、盛山村が所在した。盛山村は「八重山島年來記」によれば、1785 年の条に「富崎村は、桃里村の属地、盛山というところへ村敷替をした・・・」とあり、1785 年より村敷地を替え所在したと考えられる。現在、この村に関係する墓地は、村跡があったとされる空港より南側にある轟川付近の琉球石灰岩丘陵に岩陰墓 3 基が、空港アクセス道路建設時に確認されている。その内の一つは、「萬靈塔」と墓碑が配置されていた。この墓碑について琉球王府の歴史書「球陽」に次の記録がある。

■『球陽』卷二十二・尚泰王十五年（1862 年）

本年、八重山島白保村の平田筑登之・平得村の慶田盛仁屋・仲間村の石垣仁屋・与那国村の宮良仁屋・同村の喜佐麻宮良等五名を褒嘉して各爵位を賜ふ。

八重山島白保村の平田筑登之は、上届巳年（※）、充てて盛山村世持職と為り、任に居るの間、善く役務を弁じ頻りに農業を励まし、村民をして貢賦を完納せしむ。且滯る所の貢賦を納むこと多く、而して村中貯穀の計を為す。且盛山村は、上届巳年、其の与人・目差兩人皆任職を退き、其の受くる所の采地を將て村中に交返す。其の内産米三千束の地は已に荒蕪と為る。該平田、克く指揮を行ひて以て耕耘を為す。之に兼ねるに自己蓄す所の耕牛十口を將て村中に借給し、以て耕耘の便と為し、約八日の間資を受くるを肯んぜず。且該村、墓墳已に破れて屍骨暴散すること有るに因り、乃ち其の骨を合せ集め併びに万靈塔を設立するの時、該平田より以て其の妻子に至るまで、共に其処に到り、民を励まし力を尽くして妥らかに埋葬を為さしむ。且神酒・焼酒を発給して村民を振励し、広く猪柵を築き新に地畝を墾せしむ。且該村、人家破に就くに因り、吏役等、漸く改造を行はしむ。該平田、其の令に凜遵し、村人を勧励して家屋六軒を改造す。而して各大米三升・焼酒一沸を給す。

（『沖縄文化史料集成 5 球陽 読み下し編』球陽研究会編 1974 年）

※巳年は咸豊 7（1857・尚泰 10）年

（現代語訳）

本年、八重山島白保村の平田筑登之・平得村の慶田盛仁屋・仲間村の石垣仁屋・与那国村の宮良仁屋・同村の喜佐麻宮良等五名を褒賞してそれぞれに爵位を賜う。

八重山島白保村の平田筑登之は、上届巳年〈咸豊 7（1857）年〉盛山村の世持職となり、任務中、よく職務に当たり、頻りに農業を奨励し、村民に貢賦を完納させた。かつ、滯っていた場所の貢賦を納めることも多く、次いで村中の貯穀の計画をした。かつ盛山村は、上届巳年〈咸豊 7（1857）年〉、その与人・目差の両人がみな退職し、その支配していた采地を村中に返還した。そのうち、産米三千束の地はすでに荒廃していた。平田は、よく指揮をして〈その地を〉開墾した。これに加え、自己が飼育していた耕牛十口を村中に貸し与え、耕耘の役に立て、約八日の間資を受けなかった。かつその村は、墓墳がすでに壊れて屍骨が散乱していたので、すなわちその骨を一か所に集め、ならびに万靈塔を設立した時、平田から妻子に至るまで、共にその場所に到り、民を励まし、力を尽くして安らかに埋葬をした。かつ神酒・焼酒を発給して村民を奨励し、広く猪柵を築き、新たに土地を開墾した。かつその村は、人家が壊れていたので、吏役等に改造をさせた。平田は、その命令を遵守し、村人を勧励して家屋六軒を改造した。そしてそれぞれに大米三升・焼酒一沸を給した。

当該の頭骨が球陽で言及された場所から採取されたのかどうかは不明であるし、採集者も同伴人（当地のアクセスの困難さを考えると案内人がいたことが想定される）も特定することはできない。それでもこの記述は、当時のこの地域の墓地の状況の一端を知らしめる貴重な情報源となっている。

⑤ 与那国町（与那国島）

頭骨 1 点

寄贈されたもので、明治期につくられたカードに「琉球与那国島大和塚」とあり、裏面に、寄贈の日付が 36 年（1903 年）6 月 19 日と書かれている。採集年や詳細な経緯は不明。

与那国町教育委員会から寄せられた情報によると、与那国島の大和墓（方言地名：だまとうはが）は、島の南東部（帆安上原 1738-2）の高台に位置する崖葬墓跡で、与那原（どうなんばら）遺跡の南西約 500m の石灰岩丘陵中腹にある。 笹森儀助の南島探検を機に平家の落ち武者の墓とされ知られるようになった。『与那国島の歴史』（池間栄三著）でも、「このようなダマトウ・ハガは石垣島や宮古島にもあって、いずれも平家の落武者の墓であると伝えられているようである。」と記されている。一方、沖縄県教育委員会による 1980 年の出版物では「ヤマトバカ遺跡」として紹介されており、付近から八重山式土器（グスク期後半の 14~16 世紀頃）が出土していることにも触れられている。この墓地が形成された時期は厳密には不明だが、このような背景から、明治期には既に無縁墓地の状態になっていたと考えられる。

なお、『与那国島の歴史』（池間栄三著）には、「笹森氏は与那国島の大和墓から 1 頭骸骨を持ち帰り、京都大学の足立文太郎医学士（後の京都大学教授）に鑑定を依頼した。足立学士は解剖教室で、小金井教授の指導のもとに、この頭蓋骨を測定観察して、その論文を人類学雑誌（第 10 卷第 114 号）には発表した。」との記載もあるが、前述のとおり、笹森が頭骨を借用したのは石垣島の「大和墓」である。

【文献】

池間栄三(1959)『与那国島の歴史』

沖縄県教育委員会（1980）『竹富町・与那国町の遺跡』沖縄県文化財調査報告書 29

本川桂川(1925)『与那国島図誌』郷土研究社

⑥ 沖縄（採集地不明）

頭骨 1 点と大腿骨。

[1] 頭骨

「沖縄」と書かれた破損した頭骨で、明治期に寄贈を受けたもの。採集された市町村と経緯は不明。

[2] 大腿骨

おそらく明治期に寄贈されたものだが、詳細は不明。

⑦ その他

頭骨 3 点。

箱のラベルに琉球と書かれているが、少なくともうち 2 点は形態的に欧州人と思われる。この状況から、他の 1 点も沖縄由来のものなのか確信が持てない。

以上。